

## 四、大石館は館本村に、また分村は引又宿に

### 『廻国雑記』から『館村旧記』の世界へ

四・一 巡歴の高僧、道興准后は・・・

修験道の本山派を統括する地位にあつて、十ヶ月に及ぶ公的な旅の覚えを繊細な詩文で記し、長享元年（1487）、紀行文「廻国雑記」を著わした。

道興は、応仁の乱で荒廃した都を発ち、北陸道を経て越後から関東に入って、文明十八年（1486）の秋には、志木市の宗岡を訪れた。

本紙の前号では、本書に読み込まれた詩文から道興の足跡を辿り、志木市周辺に残された風光を懐古しつつ、遙かなときの流れを味わい、終章では、翌年の長享元年、大石信濃守の館に招かれたとき、そこで繰り広げられていた華やかな宴の有様を垣間みてきた。

道興の詩に・・・

一閑興に乗じ屢楼に登る

遠近の江山幾州を分つ

落屑霜に叫び風颯々

白沙翠竹斜陽幽なり

四・二 道興を招いたのは大石信濃守と記されているが・・・

この日、道興を招いた館の主は、戦死した父の三十三回忌の供養を執り行っていたので、道興は、冥福を祈る歌を添えて花一枝を贈った、と記されている。

彼の亡父は、分倍河原の戦い（足利成氏の率いる鎌倉公方勢と上杉顕房の率いる関東管領勢との間で行われていた合戦）で亡くなった大石房重と推測され、したがって、館の当主は、当時武蔵国の管理を任されていた守護代（守護の下の役職）、信濃大石家十一代、大石顕重に違いないようだ。

大石氏館の所在地を巡って・・・

本紙では、道興を招いた武蔵国の守護代大石顕重の館は、志木市内の「柏ノ城」としてこれまでストーリーを進めてきた。

有力な豪族だった信濃大石家は、山内上杉氏の重臣として、東京西部から埼玉県の南部にかけていくつもの城館を築いており、顕重の主たる城館は現・八王子市一帯に所在していたので、志木市の柏ノ城はその支城だったようだ。

ところが、『八王子市史』では、道興を招いた舞台は、彼が本拠としていた高月城(高槻とも書く)だったと記載され、『志木市史』とは異なっていて、相互に対立している。

いまに残された「高月城」は、標高150m余り、比高40m、秋川の断崖に建ち、東は多摩川によって守られ、長祿年間(1477～1480)に築かれたと伝えられる。

また、大石氏の城館として、大永元年(1521)、顕重から家督を継承した定重さだしげによって「滝山城」が築かれ、このとき、主城はここに移転されたという。

道興が大石氏に招かれたころ、江戸城に滞在していた万里集九という詩僧が、定重の人となりを書き記しているが、活動的な人物だったようだ。集九は、定重の依頼で、大石館に在った高樓「万秀齋」からの眺めを詩文に詠んだ、という(論議の詳細は、『市民プレス』五十七号を参照されたい)。

#### 主城は滝山城に移る・・・

いまに残された「滝山城」は、高月城跡の南東、多摩川に沿い、標高170m、比高80mの要害に所在する。その南側には加住丘陵が広がり、一帯は雑木林に覆われていて、規模が大きい。そのため、「高月城」はその支城として機能していたと考えられている。

いずれにせよ、大石氏は八王子の主城群から所沢の「瀧の城」を経て「柳瀬川」の流域に沿い、

ついに志木の支城「柏ノ城」にいたる長い防衛線を築いたようだ。ではその守りは一体誰に向かっていたのだろうか。

#### 四・三 大石城館群は西から東へ

八王子から所沢を経て志木へと、広域に展開された大石氏の備えは、誰を、そして何を防御するためだったのか。

鎌倉を目指して南下を目指す、北方の古河公方くまごう、また南方から力をもって迫り来る北条氏、北条早雲の攻勢に備え、しかも川越城から江戸城へと南北に展開された太田氏(扇谷上杉氏の家宰)と対峙する大石氏(山内上杉氏の重臣)が構えた必死の戦略だったと考えられる。

#### 道興が招かれた大石氏の館は・・・

現在、志木市第三小学校の校地となり、地域一帯は武蔵野台地の縁辺に在って、眼下には柳瀬川が流れる。堤防に続いて湿地帯(現・志木市立中学校の校地)が広がり、その地形は堅固な防御の役目を果たしていた。しかも、遠方には、大石氏と道興准后が「遠景勝れて、数千里の江山眼の前に尽きぬとおもほゆ」と詠んだ、遙かな眺望を楽しむこともできたのである。

#### 四・四 柏ノ城と民家

現在、志木市館の氷川神社境内に存置されている「図像板碑」(志木市文化財指定)には、

造立した日付として、文明十八年十月二十三日と刻まれ、十軒余りの民家（おそらく農家）の名も読み取ることができている。したがって、道興が城館を訪れたころ、その隣には、すでに民地が拓かれていたと考えられる。

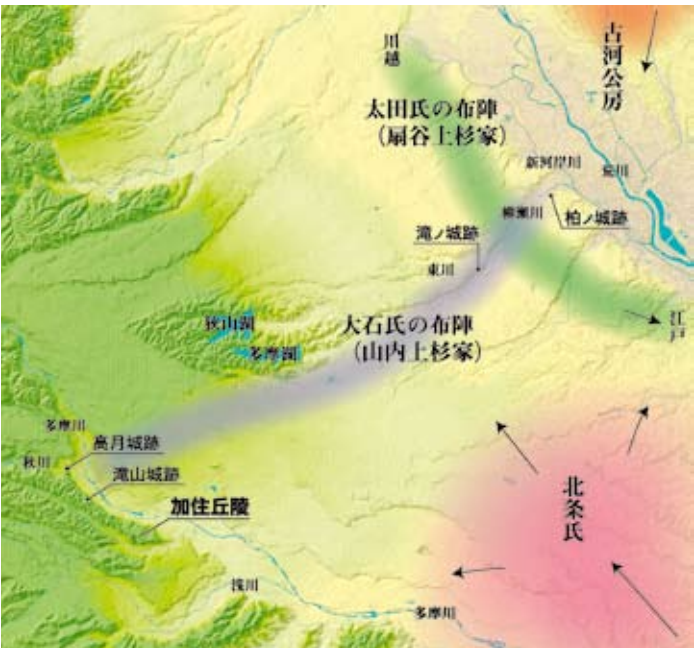
この板碑には、阿弥陀如来が来迎する姿が描かれ、かつては、柏ノ城跡（現・市立第三小敷地）に在った「城山八幡社」の御神体として祀られていた。当時の村の念仏講によって建立されたものだが、同八幡社が廃社されたさいに、現在地に移されたという。但し、遺憾ながら、道興の訪問以後、城館の活動記録は全く途絶えてしまう。では、「柏ノ城」は廃墟となってしまうのだろうか？

#### 四・五 そのころ駿河国を出て北上した北条氏は、武蔵国に進出する

大石顕重、定重が守護代を務め、道興が招かれた時（文明十五年）から十年後の天文十五年（1546）、北条氏は、世に知られる「河越夜戦」に大勝して、大石氏と志木市域は北条氏の軍門下に置かれる。

やがて大石氏の後裔は、北条氏の本拠地だった小田原に赴き、さら永禄四年（1563）、越後国を統一した上杉氏が関東に進出して、諸城を落とす。ついで北条氏の本拠地、小田原城へと向かい、三月、志木市の大石の城館は、上杉氏（景虎、謙信）の攻略によってこのとき落城した、

大石顕重・定重は、多摩川に臨んだ加住丘陵の崖線に「高月城」と「滝山城」を築いたが、さらに柳瀬川に沿って武蔵野台地を下り、支城として瀧ノ城（所沢市）、柏ノ城（志木市）を構築して、太田道灌が展開した川越〜江戸の布陣、南下する古河公方、北方を狙う北条氏と交錯する守りを固めた。



とされている。

#### 四・六 廃城となつてのちは・・・

辺りに残留した人々（かつては仕えていた臣下も戻つて）によつて館の跡地は占有され、民有地となつて村落へと変わつてゆく。後に志木市域の中核となつた「館村／館村」である。

ここで指導的な役割を果たした当村の名主、宮ヶ原仲右衛門は、自らの眼で見た地域の暮らしに加えて、伝承をも詳しく記述した『館村旧記』を残した。

彼は元禄十一年（1698）、同家の長男として生まれ、二十六歳のときから、二十五年間名主職をつとめ、また尾張家御鷹場案内役を兼務した。『館村旧記』を執筆したのは、享保十二年（1727）〜同十四年で、館村の歴史、正徳年中（1711〜1719）から享保にかけての村の状況や、言い伝えが記録されている。

現・柏町の旧家、「宮原家」に保存され、現代に至つて、大石氏館跡の歴史などを、この書によつて、細部にわたつて推し量ることが可能になつたことは、誠に幸いなことであり、志木市の指定文化財となつている。

但し、著者は文芸（例えば『伊勢物語』）を愛好し、文才に長けていたので、文芸書に比するストーリーを展開している。そのため、過去の名著に擬せられて筆を進めた部分が少なからず、『館

村旧記』は、正確な歴史を記した書ではない、との批判もある。

以下、『志木市史』、『館村旧記』解説文と解説』（編集は志木市教育委員会生涯学習課、解説は、前志木市文化財保護審議会会長、神山健吉氏）（平成二十五年発行）に準拠して紹介することにした。

『館村旧記』は、上巻の扉裏に記された著者の言葉（歌）で始まる。

かくそとも記しとめすは末の世に

昔の空をたれか知るべし

宮ヶ原氏仲恒吟

#### 四・七 宮原家の出自は・・・

『館村旧記』によれば、祖先の宮原綱輝を上総国安房郡宮原に居住した葛尾城主としているので、志木市に居住されている宮原一族は、この上総宮原氏の一族ではないか、と推定されている（現、宮原宗家みやはらむねがけ嫡流の故宮原詳一氏談）。宮原氏は、その後、志木に赴いて大石氏信濃守の臣下となつた（天文二年＝1573か?）といわれ、真



館村旧記

偽は別として、『館村旧記』の中でも、大石氏の城館を守る戦さの話題には、一層熱気がこもる。以下、『館村旧記』の一部を引用することにしよう。

#### 四・八 振り仮名付きの原文で

田面長者以来年数荒間敷之事

(田面長者を伝説上の人物と考える見解が有つて、この項全体の記述に疑問がもたれている)

「当村は田面郡司長勝殿の比より享保年中に及んで凡そ年数九百年余にも及びけれども、夫より以来当所に百姓町人等住居せし事又は守護人誰人といふことなど云ひ伝へ侍らざる也。然れども古昔は人家多くこれありと聞こへて、所々に墓所の跡多くこれある也。さて亦当所柏城、文明年中の比田面長者の住居ありし跡を城に築きて大石信濃守殿居城となれり。而も相州小田原北条家の幕下にして、小田原附十一ヶ城の内也。」

「当村をたて村といふに付きて、「館」と「館」との二字これあり。」

或人の云はく、「館」の字は高官の御方の旅行へ御出でありてお泊りなどの旅館の時にその所に御殿など建ちて御住居ありてお泊りなどの旅館の時に「館」の字を書する也、又「館」といふ字は高官の御方の其所に御殿など建ちて御住居ありたる所を「館」といふ也と。故に村里の村名に「館」の字付きたる所は、必ず位高き御方の御館ありし故に「館」いふ也。然れ

ば当所は柏城の西の丸に侍り、殊に亭の建ちたる所などこれあり、則ちその下の田所を今に「亭の下」と字を呼ぶ也。さればこそ「館村」と名づけたるも尤もにて理也。」

#### 四・九 館柏之城軍之事

抑館柏之城は昔田面郡司長勝殿の住みたまふ跡也。此の城人皇百六代後奈良院の御宇、天文年中の比は大石信濃守政吉殿の居城たり。城下には町々辻小路を通し町民の編戸軒端を連ね、見世店を構えしめ賑へり。時に越後の国の官領上杉謙信輝虎卿、小田原北条氏康卿を攻めんと大軍にて河越より武蔵野辺に押し寄せらる。その刻当城へ寄せ来たと聞へしかば、籠城の用意として兵糧を込め、或は堀を浚ひ仮り塀を掛けさせ城戸逆母木を引いてぞ待ちかけたる程なく、上杉勢押し寄せ来たり陣取りして鬨の声をあげたりける。城中には兼ねて期したる事なれば、同時に鬨をぞ合はせけり。

扨て城主信濃守殿表の櫓にかけ上り敵の勢を見給ふに、その勢雲霞の如く惟幕を並べ竹束を突並べてひかえたり。信濃守殿急ぎやぐらを飛んで下り、士卒に下知して曰く「寄せ手は多勢なれば定めて鶴翼に開きて味方を取り籠むと覚ゆるぞ。さあらん時は味方は小勢なれば千に一つも勝利を得ること難かるべし。只味方は魚鱗に連り轡をならべて打続く敵陣の真中に割つて入り、東西南北へ四角十文字に駆け散らし前後の敵に目をくばり、大将と覚しき敵あ

らば組んで勝負を決す可し。又は葉武者ならば射て取るべし。兼ねては西門より射手の違者を操り出し、番匠坂、千手堂、稻荷山の辺に伏勢を隠し置きて、敵城へ近付かば合図を定めて横矢を射させ、城中よりは火矢を打ち出すべし。敵共引き色ならば見澄してしきりに追い立て、溝沼、濱崎辺の深沼へ追い落とし、洩さず是を打ちとるべし」と委細に手だてを成敗して、いざ打立てや面々と馬物具とひしめきける。

寄手は小高き所に陣取つて城の様体を目の下に見下すに、此の城わづかに東西へ三町、南北へ二町ばかりの子城なれば唯一攻めとあなどつてぞ控へたる。さて信濃守殿の郎従には、宮ヶ原内膳、同主税、伊藤隼人、同外記、星野一角、佐藤平馬、岸林平、榎木忠藏等其の外矢部、岡本、林、戸沼、小沢、関口等城戸押し開き切て出で敵むらがりたる中へさつと駈け入れ、四角八方へ馬烟を立て追つ返し攻め戦う。……以下省略

城は落ち、ついに、信濃守は湯殿で無残な死を遂げる、として、この物語は終わる。

しかし、歴史を紐解いても、大石信濃守の中で、湯殿で不慮の死を遂げたものはいないので、虚構に過ぎないのでは、と断言する向きもある。しかし、神山健吉氏は、次のように述べている。「著者の仲右衛門が本書を著すまですでに百六十六年が経過しており、戦闘の様子は相当部分忘却されていたため、当時まで伝えられてきたわずかな伝承を、著者は大幅に増幅し、

さらに面白く潤色したのではなからうか」と。

以上のような問題点は数多いが、この本文は、天文年中(1532～34)の柏城の城主が大石信濃守某であったこと、又、永禄四年に小田原を遠征した上杉勢の分遣隊によって柏城が攻撃を受けたことを示す唯一の資料なので、無視されるべきではなからう、という見解が定着している。

#### 四・十 柏ノ城趾の発掘調査

「柏の城」は、武蔵野台地の崖線を天然の要害として築かれた館(又は砦、小規模な城)で、その背後に当る東と南方向に堀を巡らす、といわれていたが、昭和五十五年(1980)七月からほぼ一ヶ月にわたる調査が志木市によって行われた。

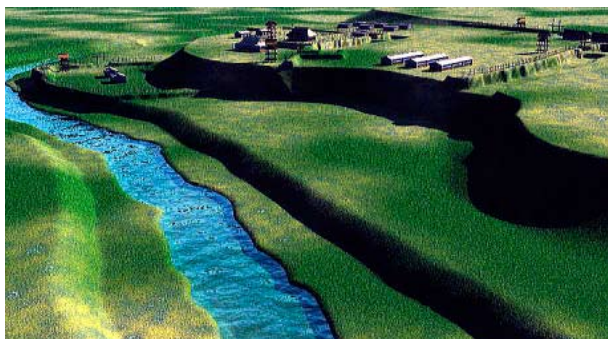
市史専門調査委員の井上国夫氏ほかが担当し、早稲田実業高校考古学研究部、民地所有者の協力を得て発掘作業が進められた。その結果、地表から四〇五メートル、箱形薬研(薬研は草木を碎いて粉薬をつくる道具)状の堀が姿を現わした。幅はほぼ十メートルで、大掘跡は空堀だった。

発掘調査の結果、詳細な跡地の見取り図が完成し、この絵図から当時の城郭の大要を推測することが可能になった。



柏城見取図

上図は、武蔵野台地の縁辺に位置する「志木市立第三小学校」と、その崖下に所在する「市立中学校」に、柳瀬川の流れを加えて、当時の「大石氏館」を見据えて作製されたもの



下図は、CG画像で柳瀬川に沿った湿田を見下ろす崖線上に築かれた城館  
<http://hya34.sakura.ne.jp/iruma/kasiwazyou/kasiwazyou.html>

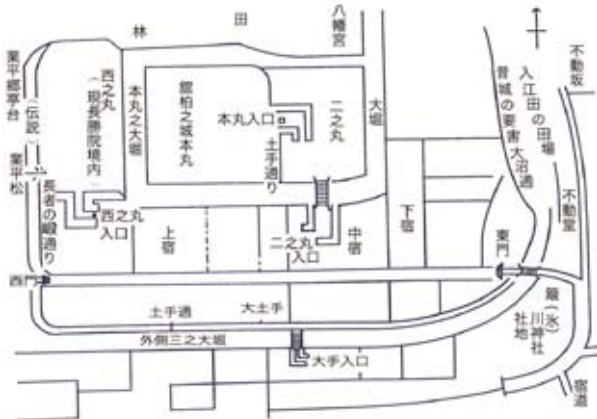
右頁に掲げたのは、「城跡の見取り図」(『志木市郷土誌』より)、その下は、当時の城郭を推測して描かれた(○)、また、この頁の下に、「城郭図」を示した。

四・十一 大石氏の城館が「柏ノ城」と呼ばれるようになったのは・・・

『館村旧記』の巻頭に、大石氏の城館は「柏ノ城」と記され、「柏ノ城」はこの書が初見だったようだ。その後、いつしかこの名称が定着して、今日では「柏」を冠した「柏町」は、志木市内の重要な町名にもなっている。

そこで、以後本紙でも、「大石氏館」とともに、「柏ノ城」の名称を使うことにしたい。

なお、『志木市史』では、河越城・江戸城・本郷城に、それぞれ「初雁城」・「千代田城」・「滝の城」の別名があるように、城近辺の風物に因んで、その特色を現わす雅名として付けられたのではないかと記し、さらに、「柏」は「か



柏城城郭図



しわ餅」に用いる「榎」ではなく、側柏（コノガシワ）・扁柏（ヒノキ）の柏なので、恐らく往時の城周辺に、そうした常緑喬木の林が茂っていたのであろう、と推測している。現に城の西の丸跡にあたる元長勝院（昭和六十年二月廃寺）の境内に、志木市が特に保存樹木と指定しているヒノキの老木があるが、この木は江戸時代に、城の名を示す記念樹として植えられたと伝えられる。

幸いにも、『館村旧記』に描かれた「柏ノ城」の配置は、現代の地図と重ね合わせることができ、上記したように、近年、大規模な発掘・調査が行われ、大堀の跡などが確かめられたので、大石氏の城館は、屋敷では無く、まさしく「城郭」だったのである。

志木市史中世資料編の『館村旧記』に戻って、

#### 四・十二 館村再始芝分屋舗取の次第

天文（註記・永禄カ）年中当所柏之城没落して、大石信濃守殿の家中並百姓町人等、悉く当所を離散し此処彼処に徘徊す。程有りて宮ヶ原、伊藤、岸など当所へ戻り、城の三の郭の北側に屋敷取りす。則ち本丸の前に宮ヶ原監物屋敷取る。是を上宿といふ。二の丸の郭に岸茂左衛門屋敷取る。是を中宿といふ。又三（註記ニカ）の丸の東の方に伊藤清左衛門屋敷取る。是を下宿といふ。その東に佐藤平蔵屋敷取る。但し城のこれありし時は、北

側はすべて間口十五間宛に割りたる家中屋舗なり。館再始の時是を割り直し屋敷取る。南側に住する輩は、岡田、榎本、矢部、岸山、渋谷、小沢等也。但し南側は間口十二間宛に割りたる家中屋舗なり。是を割り直して住す。都合家数十七軒、家内人数男女合はせて六十七人住す。右の通り館本村芝分けの根元是也。

以下本文を省略するが、最後には、程経て他村より移住してきた諸家のことも記されている。例えば、入間郡所沢村より三上氏が来たほか、尾崎、小野、綱島、高野氏などが追々と移り住んで開発に当たったという。

『館村旧記』には、詳細な「柏之城落城後の屋敷割の図」（次頁）が掲載されているが、その後移住してきた諸家をも加えた、「宝曆三年」（1753）、江戸時代中期の屋敷が書き添えられている。

つづいて開発された、「中野組之事」、「次に針ヶ谷組開発之事」に移り、

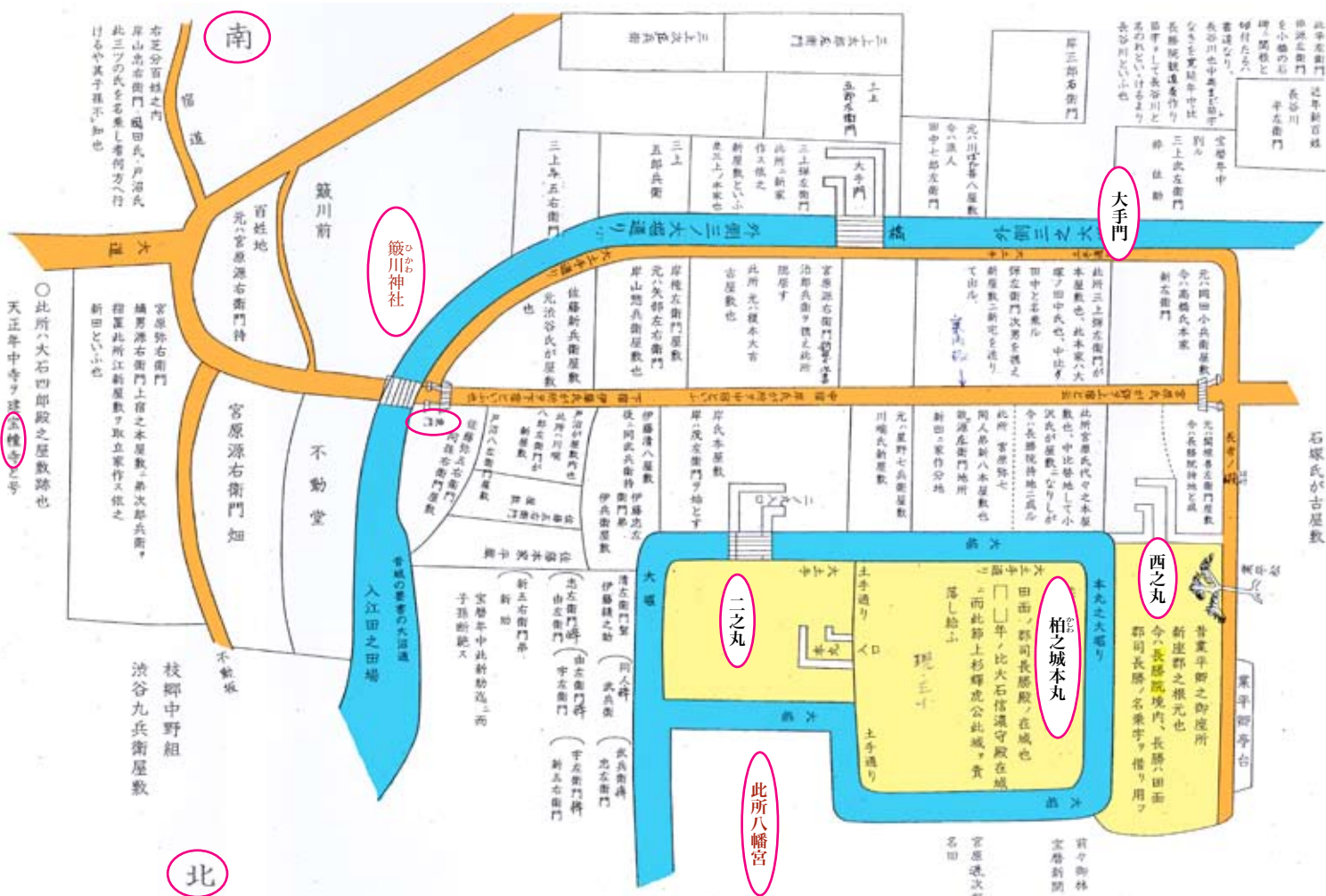
扱館六箇郷と云ハ、上宿・下宿・新屋舗・大塚・中野組・針ヶ谷組、右是を六ヶ郷と云也、元禄六四年針ヶ谷組別村になりて、館ハ五ヶ郷なり。今ハ引又を添て六ヶ郷となれり……

館本村から引又村が分村される……

その経緯について。

四・十三 館本村開発之残田地引又新田之事（但し引又は天正四年之開発） 附、三上氏族





館村再起屋敷割之図

柏の城跡が民地となって、館村の基礎が築かれたのは天文十五年 - 1546 ころとされている。  
 上図は、『館村旧記』からの引用だが、編集人が加筆、着色したもの。  
 『館村旧記』が執筆された享保十二～十四年の後、江戸時代に加筆されたらしく、その跡と思われる文字が散見される。

宝永二西歲改 宝永二年 (1705)  
 武州新座郡 館村繪図

同 引又中野

一高千三拾四石七斗七升壹合  
 外六拾壹石六斗四合 検地出高并野高  
 此反別百八拾八町三反壹畝廿七步  
 内 五拾六町五反式畝廿六步 田方  
 百三拾壹町七反九畝壹步 畑方  
 内三町四畝七步 野畑

新川岸川  
 新川岸ヨリ川道  
 引又大橋迄六里余

宗岡村

天保七丙申歲七月朔日写之 半平



本絵図の原本は星野律子家所蔵  
 『志木市史通史編』に掲載される

の事、星野氏、村山氏の事、その他↓

館本村之枝郷引跨えだごうひまたせ新田は館本村之川岸場上通りに有之。開発せし残地にて、則ち引跨の上通りに開発せしゆへに此字あきなを直ぐに用いて引跨新田と名付けたる也。この引跨といふ字の謂は、昔より今に及んで内河を上の方へ引き登す船の水夫供が、綱を肩にかけて川縁かはべりを水上へ舟を曳いて登する時に、尉殿じゆうどの権現ごんげん（「水神」として祀られていた）の下、柳瀬川の水の落ち口を綱を曳きながら跨ぐを以て、彼所の字を「引きまたぎ」と名付けたる也。古昔の歌に云く

世渡りの仕業なりとて患うれいなげに 綱曳き跨ぎぬる水手かじの身

といふ歌あり。此の歌の意は綱を曳きて柳瀬川の水の落ち口を引き跨ぎ、股までも濡るるといふ心なり。股は人の股也。今引又といふは縦たては宗岡村むねおかをむにふか若く、引跨ぎとは云恵きに因て何比なにひとなく曳股と云ひ誤れり。今は字面も書違へて引又と書する也。

#### 四・十四 然るに右引跨新田は・・・

三上団左衛門が開発せし新田也。

安土桃山時代（天正四年～1576～慶長五年～1600～）に入つて、志木市内のほぼ中央部に、館村を本村として引又村の開発が始まる。戦国の世の転機となつた、織田信長・徳川家康の連合軍が、武田勝頼の大軍に勝利した「長篠の戦い」（天正三年）のころである。

新田開発の端緒となつたのは、所沢から館村に転入した「三上弾左衛門」という人物の申し立てだつた（天正四年＝1576＝か）。

扨た団左衛門村役人へ願ひけるは「私事子供多く有之、則ち四人は本村に仕付候へども残り二人の悴せむども仕付がたく候に付、何卒内川川岸の上通りに有之残地を新開致し此所へ引越渡世致度候」と願ひければ村役人村方へ及相談の上団左衛門が願ひに任せ、・・・

以下省略するが、村役人から許可された三上氏は、現・志木市の大通りに移り、開発に取り組む。間もなく同家の近隣に、村山家及び星野家が居住するようになる。当時は館村に居住していた村山家は、本村に田畑を持ったまま移り住み、また星野家は人間郡鶴瀬村綿戸（現・富士見市綿戸）から移つてきた。また、前記した「引又新田」に続く『館村旧記』の二項目として、

右三上、星野、村山氏の三苗は、引又新田芝分けの長百おちひ姓也（神山健吉氏は、「草分けの三苗」と称している）。勿論引又は館本村の残地新田にして館村の枝郷えだごうたる故に、鎮守もなく菩提寺もなし。因みに館本村氷川明神を鎮守とし、同所宝幢寺を菩提寺とする者也。と記されている。

#### 四・十五 引又草分けの三苗

三上、村山両家は現今まで、また星野家は明治の末に至るまで、その後継続して同所に居

住しており、又、三家それぞれに残された家系の資料も傍証として役立つている。故に、『旧記』の記述は、正しく志本草創三家の由来を語るものと云えよう。移住のときから数えて、本年は四百四十年にもなるのである。

#### 四・十六 舘村地頭の福山月斎邸に飛火 長勝院へ免田宮原弥右衛寄附の事

元和年中（1615～24）、当村の地頭は福山月斎殿といへり。今の城山の本丸に住したまふ。勿論その頃迄は本丸の廻りに築地、掛塀建ちて有し之、然るに弥右衛門の居屋敷は、本丸の前今の上宿に住居す。弥右衛門不慮の火難に逢ふ。折節南風激しく遂に月斎殿の住たまふ本丸へ炎もへ移り、御殿不レ残焼け落ちたり。依レ之弥右衛門則ち長勝院に寺入りす。時に住持を以て月斎殿へ詫びす。御聞入届御免有之しなり。その後弥右衛門金子を以て長勝院へ右之礼に参る時、住持被レ申しは、か様之事に出家として金子を受納すべきにあらず、何ぞ□記なる事をせられば然りと。弥右衛門是を承知して、然れば当院には畑あつて田なし、田地を寄附せんとて乃ち閑場において、右書面之中田四反式畝拾九歩寄附し詫んぬ。

#### 舘村本村の枝郷だったので引又に名主は置かれず・・・

その代りに、組頭二人が置かれたただけだった。しかし、寛永二年（1625）、引又百石の地が旗本新見七右衛門正信の知行するところとなり、舘本村から名実共に独立して「引又村」と

なる。

寛永年間（1624～44）に、「引又河岸」が開設され、三上又兵衛は回漕店を創業して運営していたが、組頭の地位にあつて、初代の名主に取り立てられる。

#### 四・十七 新田芝分けの後、半世紀経って

引又村は繁栄に向かつて、余りにも急速な変革を遂げた。

新河岸川の舟運によって、引又と江戸・川越は水運で結ばれる。その端緒となつたのは、「川越の大火」だった。

当時の川越は、江戸の幕府と直結し、情報を共有していた。寛永十五年（1638）、三大東照宮の一つに数えられていた川越の「東照宮」と、三代将軍との所縁が深かった「喜多院」等が焼失、徳川幕府は大変神経を使い、その再建のため、江戸城内の「紅葉御殿」を解体して、用材を川越に移転することを決めた。このとき、運搬に、陸路より効率的な、新河岸川による水運が選ばれたのである。当時の新河岸川では、小規模な舟の輸送は行われていたが、本格的な舟運はこのときに開始された。

#### 四・十八 川越藩主の命令によって、「井下田回漕店」が開業したのは・・・

明暦二年（1656）といわれ、水路が整備されて、川越から農産物が江戸に送られるようになる。

舟運は、川越と江戸を結ぶ物資交流の大動脈となった。

回漕店を支えてきた井下田家は、初代から十八代にわたって綿々と引き継がれたが、最後の舟運を務めた井下田四郎氏は、貴重な記録、『引又河岸の三百年』を残されている。

新河岸川には多数の河岸場が置かれたが、その中でも、「引又河岸」は、「奥州街道」との交点に位置し、内陸部との交通に恵まれていた。明暦（1655）から寛文（かんだん 1673）年間にかけて、六斎市（月間六回行われる定期市）や宿場（引又宿）が設けられた。

「奥州街道」は・・・

かつて武蔵国の武士が鎌倉に向かうための役割を担っていた「鎌倉街道」の側道としての古道が元になり、次第に利用され始めた、と云われている。江戸に向かう参勤交代の大名が、しばしば経費節減の手段として行列を簡略化し、日光街道から甲州街道へのバイパスとしても使われた。

現在の志木市役所の下流、柳瀬川と合流する地点に設けられた船着場の「引又河岸」は、廻送された積荷の中継点となつて繁盛し、引又を賑わいのまちへと導いたのである。

荷物は、現・新座市を経て都内に入り、清瀬、小平方面へ、また飯能などに向かった。軒を運べる商家

河岸場から運ばれた荷物の取引で賑わい、二七の市が定期的に関われ、酒造、肥料商、穀物商、呉服商、荒物商などの大店（規模が大きな商店）が並ぶ。

#### 四・十九「野火止用水」の開通

この用水は、承応四年（1655）、自領「野火止」の原野を開拓する灌漑のために、川越城主松平伊豆守信綱によつて掘削された。又の名を「伊豆殿堀」という。現・新座市から志木市内に入ると、そのメインストリートを貫通して新河岸川に流れ込んでいた。

ところが、引又の対岸に当る宗岡地域を知行していた旗本岡部氏の家臣、白井武左衛門は、用水の末流が無効用水として流れていたのを見て、これを宗岡地域の灌漑に利用しようと考えた。そのため、新河岸川を越える、巨大な架け樋を考案し、寛文二年（1662）、長さが百二十六間（約200メートル）に及ぶ巨大な樋が架けられた。

上流から流れてきた用水を子枘（こます）に一旦貯め、上部の箕（かひひ）（筒状の樋）から落とし、大枘に貯めて再び落とすと、流水は勢いを増す。この流水を上向き箕（登竜）に登らせて新河岸川を越える。水路橋の柱が四十八本だったので、伊呂波四十七文字に因んで「いろは樋」と呼ばれるようになった。

引又河岸に荷揚げされた貨物は、一旦、現・志木市の市場通りで取引され、またこの大通

りには定期の市が立ち、また大店の商いで股賑を極める。

四・二十 文化十一年「引又宿絵図」が公けにされる・・・

前記した引又新田「草分けの三苗」の一つだった「星野家」は、明治時代になって志木市から転居したが、昭和四十八年(1973)、神山健吉氏が調査のため同家を逗子市に訪ねた。そのとき、数多くの同家の遺品が氏に貸与された。その中の一つが上に掲出した「文化十一年の絵図」である。

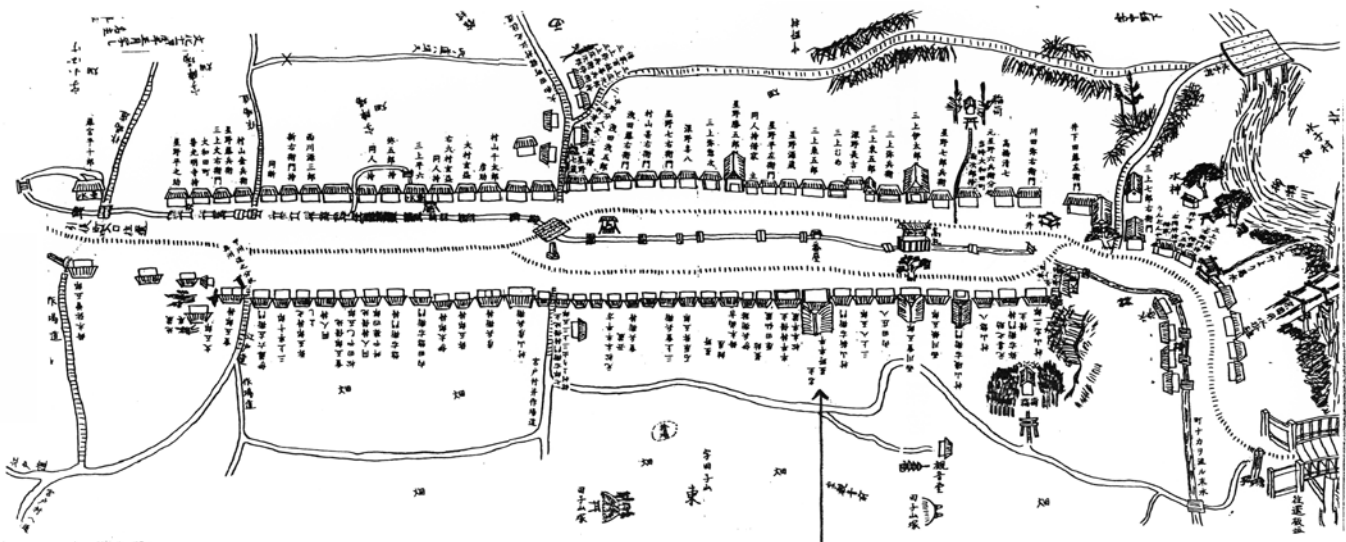
この絵は、文化七年(1800)から三十七年にわたって、引又・市場の名主を務めた星野半平が、その頃の大通り周辺の家並みを詳細に描いたもので、「野火止用水」(又の名は「伊豆

殿堀」や「いろは樋」のほか、現存するいくつもの旧家を見ることができる。この引又宿の縮図は、当時の様子を我々の眼前に示す貴重なものと云えよう。

また、半平は、「館村」の半世紀前を懐古して、宝永二年(1705)「館村絵図、同引又・中野」を描いている(前ページに掲載)。

『星野半右衛日記』は・・・

星野家の後裔で、弘化四年(1821)から嘉永三年(1850)頃まで引又宿の名主を務めた半右衛門が記した十一冊の日記だが、前記したように、同家から神山氏に手渡された。次号でその概要を紹介しよう。



文化十一年 引又宿絵図



＝ 志木市の歴史 ＝

・文明十八年、「むねおかといへる所」として、文書に「宗岡」が記録される

・巡歴の高僧、道興准后の、「廻国雜記」に記された大石信濃守の城郭について具体的な記述は未だに発見されず

・天文年中、「柏城」の城下は賑わっていた

・永禄四年、上杉謙信が柏城を奪取する

・この間に、城郭址は民地となって「館村」が発足する

・天正四年、「館村」を本村（本郷）として、「引又」が子村（枝郷）となる

・寛永二年（1625）、引又の地が旗本新見七右衛門正信の知行するところとなり、館本村から名実共に独立して「引又村」となる。

・引又草分け三苗の三上、村山両家は、現今までつづく

・『館村旧記』が執筆され（享保十二〜十四年）、館村再起屋敷割之図が残された

・天保二年（1836）、星野半平描く「宝永二年（1705）の武州新座郡館村絵図・同引又中野」

・新田芝分けの後、半世紀経ち、引又村は大きな繁栄に向かって、急速に変革を遂げる（文化十一年 引又宿絵図）

元号	西暦	
1450	文明	1469
1500	長享	1487
	延徳	1489
	明応	1492
1501	文亀	1504
1504	永正	1504
1521	大永	1521
1528	享禄	1528
1532	天文	1532
1555	弘治	1555
1558	永禄	1558
1570	元亀	1570
1573	天正	1573
1592	文禄	1592
1596	慶長	1596
1615	元和	1615
1624	寛永	1624
1644	正保	1644
1648	慶安	1648
1652	承応	1652
1655	明暦	1655
1659	万治	1659
1661	寛文	1661
1673	延宝	1673
1681	天和	1681
1684	貞享	1684
1688	元禄	1688
1704	宝永	1704
1711	正徳	1711
1716	享保	1716
1736	元文	1736
1741	寛延	1741
1744	延享	1744
1748	寛政	1748
1751	宝暦	1751
1764	明和	1764
1772	安永	1772
1781	天明	1781
1789	寛政	1789
1801	享和	1801
1804	文化	1804